

第8回日本神経心理学会報告

第8回会長 山口 成良

(金沢大学医学部神経精神医学教室)

第8回日本神経心理学会学術研究会は去る昭和59年9月7日・8日の2日間にわたって金沢大学医学部十全講堂と記念館を会場として行なわれた。それに先立つ6日の午後には金沢市文化ホールにて、連絡・公報委員会、会則委員会、機関誌発行準備委員会、企画・運営委員会、評議員会などが行なわれ、とくに機関誌発行準備委員会では来年度(昭和60年)から機関誌を発行することに決定した。

第8回学会は天候にもめぐまれ、400名近くの参加者があり、特に当日参加の方が147名もあって、予稿集を急いでコピーしなければならないほどであった。一般演題数も86題と最高の集まりであり、やむなく2会場制をとったが、今後1会場制を貫くときには、発表時間と会期の検討を要すると思われる。

シンポジウムは「前頭葉の神経心理学」をとりあげ、それを4つのセッションに分け、シンポジストにはその方面の第一人者が各自の研究テーマについて発表され、シンポジスト間ならびにフロアーからも活発な質疑応答がなされた。当日のシンポジウムの演題名と演者は以下のとおりである。

- I. 前頭葉の形態と機能 司会 豊倉 康夫
 - 1) 前頭葉の解剖学 川村 光毅
 - 2) 前頭葉のCT解剖学 岩田 誠
 - 3) 前頭前野と短期記憶 小嶋 祥三
 - 4) 前頭前野と注視行動 鈴木 寿夫
- II. 手と前頭葉 司会 鳥居 方策
 - 1) 肢節運動失行の臨床的地位 山島 重
 - 2) 前頭葉障害と強制把握 小山 善子

3) 道具の強迫的使用と病的把握

森 悦朗

4) 前頭葉と失書

杉下 守弘

III. ことばと前頭葉

司会 浜中 淑彦

1) 前頭葉内側面と言語

本村 暁

2) 超皮質性運動失語

榎戸 秀昭

3) Broca 失語と純粹語啞をめぐって

一非流暢性失語の概念の再検討一

波多野和夫

IV. 前頭葉と精神症状

司会 山口 成良

1) 前頭葉と精神症状

大東 祥孝

2) 前頭葉と変性疾患

羽田 忠

3) 前頭葉と精神分裂病

倉知 正佳

シンポジウムの発表論文のすべては、雑誌「精神医学」の特集号として掲載される予定である。

特別講演は、不朽の名著「失行症」の著者であられる秋元波留夫先生が「失行症研究とHugo Liepmann」と題して講演され、Liepmannの1900年発表の論文から、その後の業績、自らの命を絶ったその人柄、さらには富山医大の遠藤教授が撮られた Liepmann が勤務し、失行症の論文の対象となった患者を診たベルリンの Dalldorf 病院の現在についても紹介され、会員一同に強い感銘を与えた。講演の内容は本機関誌に掲載されている。

一般演題は多岐にわたり、その全貌を要約することは至難なことであるが、発表順からいえば、視空間失認、視覚認知と眼球運動、精神分裂病者の認知機能、幻肢・幻聴の出現機序、脳梁損傷と人格変化、肢節運動失行、強制把握、純粹失書、失音楽症、皮質聾、聴覚認知障害と

聴覚誘発電位，視床性聴覚失認，相貌認知障害，
純粹失読，失語症の CT 所見の集積検討，視床
性失語，自閉症児の認知障害，交叉性失語，前
頭葉性無言症，脳血管障害と局所脳循環，前頭
葉機能検査，精神分裂病と CT 所見など多方面
の問題が論じられ，従来の脳血管障害や変性疾
患における失語・失行・失認の検討とともに，

精神分裂病，自閉症などの精神疾患についても
神経心理学的アプローチが盛んに行なわれるよ
うになったというのが今回の学会の特徴でもあ
ったと思われる。

懇親会は7日夜，記念館で行なわれ，大橋博
司先生，野上芳美先生の美声の披露もあり非常
に打ち解けた雰囲気であった。